

瀕死のバラードⁱ

共に生きる移民の兄弟たちよ
私たちに敵意を抱かないでくれ
私たち富める者に憐れみを抱くなら
安寧は近く誰にでも幸運をもたらすだろうから

私たちが怯えた数百万の痴れ者に見えるか
これまでに腐らせてきた魂ならば
ずっと以前から墮落し 憎しみに満ちている
そして我ら白人は、光を浴びⁱⁱ雷光となった
我らの不幸を履行するものは誰もいない
だが祈ろう 峻厳なる者に 我らすべての助けとなることを

諸君ら兄弟 と呼びかけるのだから 頼む
警戒しないでほしい 不正により
殺された私たちを。だが承知のように
誰もが養子先を選べたわけではない
私たちは瀕死なのだ、魂の伴侶に見限られて、
私たちは血を分けた兄弟ではない、殺人に頼るのでなければ…

養子縁組の兄弟として 生きようと試みることもできるだろう
夢と 〈夢〉の夢は打ち棄り
祈ろう 神々に 彼らが互いを知り合い混じり合うことを

私たちは互いを知ることなくして認め合っていたⁱⁱⁱ
それは賢者と人民の時代だった
だが科学は顔を人種別の顔^{iv}に変え
顔の認識を相貌失認に変えてしまった

脅威の育つ処に 神の力が育つことはない^v
だが祈ろう 神でも私でもない存在に、《至高者たち》に
私たちが創り出され 結ばれ合うことを もし
私たちが今の私たちと異なる存在であるならば
諸言語のうちいくつかが煌々と破碎され
言語が完璧なものとなることを
アイデンティティは DNA になった
二十一番目（の世紀）とは詩的なものだろう
さもなくば存在しないであろう^{vi}

Frères migrants qui avec nous vivez
N'ayez les cœurs contre nous ennemis
Car si pitié de nous riches avez
Paix en aurait plus tard pour tous une chance

Vous nous voyez cy apeurés à millions d'imbéciles!
Quant à l'âme que trop avons pourrie
Elle est piéça avilie et haineuse
et nous les blancs, devenus irridiés et foudre
De notre mal personne ne s'acquitte
Mais prions l'inexorable que tous nous puisse aider

Si frères vous clamons pas n'en devez
avoir méfiance, quoique fûtes occis
par injustice. Toutefois vous savez
que tous hommes n'ont pas su l'adoption élire
Nous sommes mourants, âmes-sœurs délaissant,
Frères de sang ne sommes, sauf par hominicide…

Comme frères adoptifs pourrions tenter de vivre
Laissant le rêve et le rêve du Rêve^{*}
Prions les dieux qu'ils se connaissent et se confondent

Nous nous reconnaissons sans nous connaître
C'était le temps des sages et des peuples
Or la science a changé le visage en faciès
Et sa reconnaissance en prosopognosie

Là où croît la menace aucun dieu ne croît plus
Mais prions l'être ni dieu ni moi, « suprêmes »
Que *nous* s'invente et se fédère si
Nous sommes tous ce que ne sommes pas
Que les langues parfaites en cela que plusieurs
Fassent voler en *éclats* éclairants
L'identité devenue ADN
Le vingt-et-unième (siècle) sera poétique
Ou ne sera pas

〔墓の夜へと……〕

墓の夜へと 私に先立った君
先立つのではない もはや時はないのだから
墓の夜 そこでは誰も待っていない

しばしば夜へと、眠りによって入り込む私は
夢遊病者のように目覚め、一望監視の張り出し付きの
昼間の死後の筆耕板に辿り着くが^{vii}
そこでは数百万の生者たちが暮らしている
密かな不眠は夜を昼へと遺贈する

身近な者たちを想う
二度と会うことがないかのように
活きた眼に切り詰められ
死を前にしたダンテのように^{viii} 無力に沈黙する

*

Dans la nuit du tombeau toi qui m'as précédé
tu ne précèdes pas parce qu'il n'y a plus le temps
dans la nuit du tombeau où personne n'attend

Souvent dans la nuit, entré par le sommeil
je me lève somnambule jusqu'au plateau de scribe
posthume du jour en surplomb panoptique
d'où vivent des milliards de vivants
L'insomnie en secret lègue la nuit au jour

Je pense aux très proches
comme si je ne les verrais plus
réduit à l'œil vivant
muet inefficace comme Dante avant la mort

〔涙は証言する……〕

涙は証言する
涙がどこから込み上げてきたのかを
証言は認める
そして誰が認めるのかを知らない
この証人のため 誰が証言するのか
エレクトラは彼女を認める者を認めた^{ix}
そしてシノン城のジャンヌも^x
エマオ^{xi}は場であった
承認のための

Les larmes attestent
la source d'où montent les larmes
Le témoignage reconnaît
et ne sait pas qui reconnaître
Qui témoignera pour ce témoin
Electre reconnaît qui la reconnaît
Et Jeanne à Chinon
Emmaüs fut un lieu
de la reconnaissance

現前？

それは存在と同じ数だけあり、「具体的には」、大切な存在がふと訪れ、現れる。現前は一刻ごとに消滅の危機に曝されている。生を忘却させる微睡の介助者^{xiii}たる、愛する存在の消滅、そして「私」自らの「遺言なき」消滅によって。

誕生の瞬間は復活である。「新生児」による輪廻転生、とハンナ・アーレントは言った^{xiii}。幼形成熟を言葉に導いてゆく必要がある。複数の現前？ それは会食者たちが互いに対して現れるときに生ずるのと同じ数だけ存在する^{xiv}。いかにして愛し合うか？ 愛する存在であるより愛される存在であることで、魂の伴侶の連結符は始まる。

Présence ?

Il y en a autant qu'un être, et « concrètement » l'être-cher advient, se présente. Présence menacée de perte à tout instant par la disparition des aimés, l'auxiliaire léthargique de la vie, et « ma » propre disparition « sans testament ».

Le moment de naissance est la résurrection : métempsychose par les « nouveaux-nés », disait Hannah Arendt : les néoténiques qu'il faut amener à la parole. Présences ? Autant qu'il en advient dans l'apparition mutuelle des convives. Comment s'aimer ? C'est d'être-aimé *plus encore qu'aimant qui lance le trait d'union des âmes-sœurs.*

では、さらば、ジョアシャン^{xv}

では、さらば、ジョアシャン！
パラティーノ山より リレを喜んだ君は^{xvi}
オデュッセイアと違い 帰郷しなかった
君の友達と 類推の山^{xvii}へと！

君の後では ヘルダーリンが湖に帰還した^{xviii}
そして 思索者^{xix}はいたものの 人民には二度忘れ去られた
君と遠くない処では ルヴェルディが退隠した^{xx}
そしてサン＝ポール＝ルーにはカマレが
パルナッソス山より超現実的であった^{xxi}

君なら 今日の人間たちが自分の惑星について語るとき
なんと言うだろうか？

だが大地には、デカルトが蜜蠟に問うた
問いが当てはまる、つまり
「それは同じ物に留まるだろうか？」という問いが^{xxii}
それは留まる〔＝住まう^{xxiii}〕ものだと言わねばなるまい
たとえ住居〔Wohnung〕がもはや家〔Heim〕ではなくとも

破碎させよう
民族であれ、国籍であれ、ひとを閉じ込めるアイデンティティを
それが不屈の身分秘匿者、美しき
識別可能者であり続けるために

教えてほしい 再び地上に立ち還る術を
〈擁護と顕揚〉によって^{xxiv}

「青いのは地球、でも世界は緑」^{xxv}

Adieu donc Joachim

Adieu donc, Joachim !
Plus te plaisait Liré que le mont Palatin
Et différent d'Ulysse tu n'es pas reparti
Vers le mont Analogue avecque tes amis !

Hölderlin après toi fit *retour* à son lac
Et malgré le Penseur fut oublié deux fois du Peuple
Non loin de toi Reverdy fit retraite
Et Camaret pour Saint Pol Roux
plus surréel que Montparnasse

Que dirais-tu des humains d'aujourd'hui parlant
de leur planète ?

Mais à la Terre s'applique
la question de Descartes à la cire ;
« La même chose demeure-t'elle ? »
Il faut avouer qu'elle demeure...
Même si la *Wohnung* n'est plus le *Heim*.

Faisons voler en éclats
Son identité emmurée, ethnique, nationale
pour la garder insoumise incognita, belle
reconnaissable

Enseigne-nous la reterrestration
Par la Défense et l'Illustration

« Blue is the planet but green is the world. »

- ⁱ François Villon の「絞罪人のバラード」(Ballade des pendus) を想起させる詩であり(森田さんの示唆による)、パロディと言えるほど近い表現を用いている(別紙参照)。
- ⁱⁱ irridié. 辞書に見当たらない表現。irradié の誤記かと思い、そのように訳す。またその場合、「光に照らされた」だけでなく「放射線を浴びた」という意味も考えられうると思うが、ここでは差し当たり考慮しない。
- ⁱⁱⁱ connaître はクローデル的な co-naître 「共に生まれる」を響かせている可能性があり、その場合「(西洋人と非西洋人は)共に生まれたわけではないが、互いを認め合う」というニュアンスが現われてくるだろう。またその主題がクローデルにおいて現われるのは『東方の認識』(1900)であったのだから、クローデル的な東西の出会いもこの詩に反映されていることになるか。
- ^{iv} faciès. 顔つき、風貌;〔特に〕(マグレブ人の)褐色の顔(=～basané)注:本来は学術用語だが、1960年代には人種差別的な意味合いをもって用いられた。(ロベール仏和)
- ^v ヘルダーリンの詩「パトモス」の一節「だが危険のあるところ、そこには救いの力もまた育つ」(Mais là où est le danger, croît aussi ce qui sauve / Wo aber Gefahr ist, wächst Das Rettende auch)を踏まえた表現。ハイデガーはこの詩句を「技術とは何か」で引用している。
- ^{vi} アンドレ・ブルトンの『ナジャ』の末尾の一文「美とは痙攣的なものだろう／さもなくば存在しないであろう」(La beauté sera CONVULSIVE OU ne sera pas.)を踏まえた表現。他方、le vingt-et-unième (siècle)とあるのは、おそらく直前にDNAの話をしているので、21世紀というのと同時に21番目の染色体の話をしたいのだと思われる。この場合、「21番目の染色体は詩的な染色体だろう」という意味も含まれる。ちなみにこの染色体の異常はダウン症として現われるそうだが、それと関わりがあるかは不明。
- ^{vii} jusqu'au plateau de scribe posthume du jour en surplomb panoptique. 全体的に不詳。
- ^{viii} こちらも不詳。
- ^{ix} どのエピソードを指すか不詳。
- ^x ジャンヌ・ダルクは1429年3月28日にシノン城を訪れ、王太子が王として宣言し、フランスの解放を指揮するよう訴えた。
- ^{xi} 「ルカによる福音書」(24章13-35節)に登場する地名。復活したイエス・キリストが現われ、弟子であるクレオパともう一人に近づき、話をしながら歩いた。彼らがそれがイエスだと認識したときには、イエスはいなくなってしまった。また「エマウス運動」という、1949年にアベ・ピエールが設立したホームレス支援のためのリサイクル品販売協会が存在する。
- ^{xii} aimés と auxiliaire...を同格と取るが、そうでない解釈も可能かもしれない。léthargique は「嗜眠性の、嗜眠状態にある」「停滞した、麻痺した、無気力な」「眠気を誘う」などの意味があり、睡眠補助などと訳せるかもしれないが、ここでドゥギーはこの語の語源にあるギリシア語の lēthē (忘却)の意を際立たせているように思われる(なおハイデガーも論ずるように、この語は a-lethe-ia (真理)と関わりがある)。したがって、ここでドゥギーが示唆しているのは、生の倦怠や耐え難さに対して、同伴者の存在が、その苦しみを(それがたとえ真理とは遠くことであろうと)束の間忘れさせてくれる、ということではないか。
- ^{xiii} Cf. 森川輝一『＜始まり＞のアーレント「出生」の思想の誕生』(岩波書店、2010年)
- ^{xiv} ハンナ・アレントは『過去と未来の間』でルネ・シャール(ルネ・シャール)の詩 Feuillet d'Hypnos の一節「私たちが一緒に食事をするたびに自由は食席に招かれている。椅子は空いたままだが席はもうけてある」(At every meal that we eat together, freedom is invited to sit down. The chair remains vacant, but the place is set / À tous les repas en commun, nous invitons la liberté à s'asseoir. La place demeure vide mais le couvert reste mis.)を引用する。この食席のイメージから convive の語がやってきたと思われる。
- ^{xv} この詩は全体にジョアシャン・デュ・ベレーの詩「[幸いなるかな、ユリシーズのように…]」の本歌取りとなっている(別紙参照)。
- ^{xvi} リレはデュ・ベレー生誕の地。上述の詩に Plus mon petit Liré, que le mont Palatin とある。
- ^{xvii} 類推の山 (le Mont Analogue) はルネ・ドーマルの小説作品の題。ドゥギーはその詩論 (La poésie n'est pas toute seule, Seuil, 1988) の第1章を Nouvelle cordée pour le mont Analogue と題しており、この語を、自らの奉ずる類推能力を中心とした詩学のために再利用している。
- ^{xviii} 不詳。ヘルダーリンの詩「人生の半分」(Moitié de la vie / Hälfte des Lebens)への言及?
- ^{xix} ハイデガーを指す。後半の「人民には二度…」というの是不詳。
- ^{xx} ルヴェルディは1926年、37歳の時にカトリックに帰依し、妻と共にパリを去り北西部ソレムの修道院に移住した。これはデュ・ベレーの生誕地ルレと同じロワール地方である。
- ^{xxi} サン・ポール・ルーは1898年にパリを去り、ブルターニュの最西端のフィニステール地方にあるカマレ・シュル・メールに移住し、墓地もそこにある。超現実的の云々はシュルレアリストによる彼へのオマージュを踏まえたもの。
- ^{xxii} デカルトの第二省察における蜜蝋の分析への言及。正確には La même cire demeure-t-elle après ce changement ?
- ^{xxiii} 住むことと詩の関係は、ヘルダーリン、ハイデガーを踏まえてドゥギーが詩論の中心に置く考えである。
- ^{xxiv} もちろんデュ・ベレーの著書を指す。
- ^{xxv} ???